

連母音「エイ」の発音に関する社会言語学的研究

尾崎 喜光[※]

A Sociolinguistic Study on the Japanese Diphthong [ei]

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

日本語の連母音「エイ」の実際の発音については、尾崎喜光（2022）において、連母音のまま「エイ」と発音するか（たとえば「映画」を「エイガ」、「先生」を「センセイ」）、それともそこから変化して融合・長音化した「エー」と発音するか（「映画」を「エーガ」、「先生」を「センセー」）を、種々の具体的な発話データを対象に、場面の改まり性（広い意味での待遇性）と関連づけて予備的調査を行った。分析の結果、全般的に「エー」が優勢であるものの、テレビやラジオのCMにおける自社名のコールや、キリスト教会の礼拝における牧師の説教等での重要語句には「エイ」も比較的現れやすいことから、事象やそれを表わす語自体が持つ改まり性や重要性が「エイ」の発音に関与している可能性を指摘した。

本稿では、改まり性や重要性という観点から離れ、そもそも全国を見渡したとき、「エイ」「エー」の発音に現在どのような地域差があるのか、また語種の違い、語構成や活用等の文法的特徴との関係、語中や文中での出現位置との関係から、「エイ／エー」の発音にどのような傾向があるかについて、全国および東京都を対象に筆者が最近実施した無作為抽出多人数調査による社会言語学的調査の結果から、その一端を明らかにする。

2. 調査概要

本稿で分析対象とするデータは次の2つの調査により得た。

- (1) 全国での多人数調査（2009年3月実施、20歳～79歳の男女803人が回答）^{注1}
- (2) 東京都での多人数調査（2018年10月～2019年3月実施、20歳～69歳の男女1,049人が回答）^{注2}

実査はいずれも競争入札により選定した同一の調査会社に委託した。人口比に従って調査地点を無作為抽出し、さらに各調査地点から回答者を無作為抽出した。調査は個別面接法により行った。なお、(1)の調査の詳細は尾崎喜光（2015）で、(2)の調査の詳細は尾崎喜光（2021）で説明している。

キーワード：音声変化，全国調査，東京都，無作為抽出多人数調査，録音調査

※ 本学文学部日本語日文学科

3. 結果と考察

3.1. 全国での状況

連母音「エイ」を「エイ」と発音するか「エー」と発音するかについては、上野善道編(1989)所収の言語地図「エー」がある。図1として示したのがそれである(歴史が相対的に新しい北海道は地図から除かれている)。

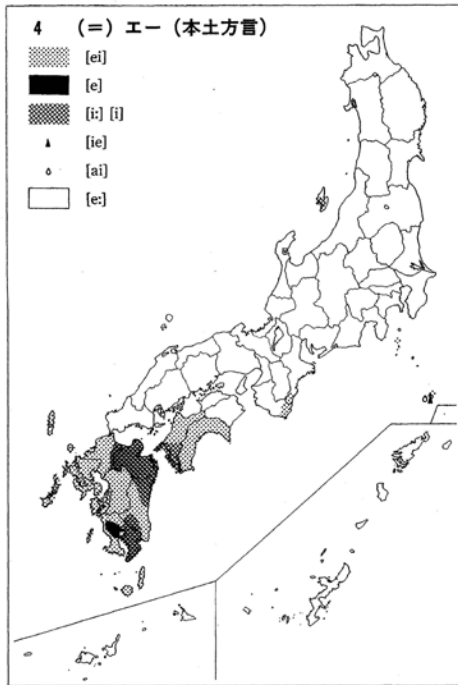


図1 エイ／エーの全国分図

これによると、大分県等を除く九州の比較的広い地域および四国の愛媛県・高知県では本来の「エイ」([ei])が行われている一方、それ以外のほとんどの地域ではここから変化した「エー」([e:])が行われている。地域的には劣勢となったこの「エイ」は、かつての発音が保持されたものと考えられる。

図1は言語地理学的な観点から見た伝統的な分布状況であるが、現在の状況がどうなっているかについて、多人数調査の観点から見てみよう。

本調査では、音声に関する項目は調査票の最後に持ってきた。調査員から回答者に対し、事後に専門家が分析するためこれ以降は回答を録音させてもらいたい旨を説明してもらい、回答者から了解を得た上で録音を行った。

録音はICレコーダを用いた。回答者の音声は調査員の質問と重ならないよう、質問の後に1～2秒間を置いてから、少し大き目の声で、「です」等は付けずにその言葉だけを言ってくれるよう調査員から指示してもらった。

録音項目は全23問あるが、その一つに連母音「エイ」の発音を確認することを目的とする問がある。調査に用いた語は「英語」であり、次の質問により回答者に「英語」と言ってもらった。

(10) 中学に入ってから勉強する外国語は…。

質問文の末尾は「何ですか」というきちんとした言い方にせず、言いさしのような形にした。調査時間が短縮でき、また回答も補充形式的にスムーズに得られると考えたことによる。

事後の聴き取りは筆者が行なった。

結果は図2のとおりであった。録音が得られなかった回答者やこの問いについての無回答者、適切な回答が得られなかった回答者が45人いるため、有効回答者数は758人である。

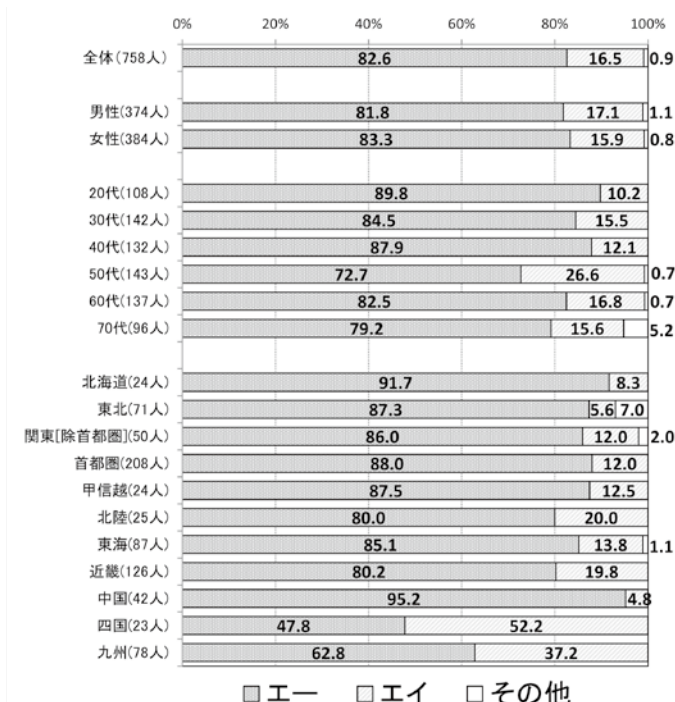


図2 「英語」の連母音「えい」の発音（全国）

グラフの一番上の「全体」によると、使用者率という観点から全国を見たとき、現在「英語」の「えい」を「エー」と発音する人は8割超と多数を占めていることがわかる。一方、これを「エイ」と発音する人は少数であるものの、現在でも2割弱はいることも確認される。（なおわずかに見られる「その他」は、舌の調音位置が高い「狭いエー」等である）

連母音の中でも「オウ（[ou]）」は「オー（[o:]）」ではほぼ定着しているのに対し、「エイ」は定着の一手手前の状況と言える。

これに関連し高山知明（2003）は、[e] と [i] はたがいの音色が近いため日常の発音はそれらが連続した [e:] であるが、正しい発音は仮名通りの [ei] であるという規範意識が存在し実際にそう発音されることもないわけではなく、発音は流動的であるとする。その上で、こうした状況にあるのは、[ei] から [e:] への変化がまだ完全に終わっておらず、[e:] の形が定着しきっていないためだと考えられるとする。全国での使用者率という観点から見た場合も、「エー」が定着しきっていないことが、今回の調査により確認された。^{注3}

これをさらに回答者の属性別に見てみよう。

男女差はほとんどないと言ってよい状況である。年齢差についても、明確かつ一貫した傾向は認められない。年齢差には言語変化が反映されているケースが少なくないが、これについても該当すると考えるならば、「エイ」から「エー」への変化は現在安定期にあり、数値的には「エー」が完全に定着する一手手前であるものの、それが実現するまでにはまだ相当時間がかかることが推測される。

地域差が明確に認められ、元の発音である「エイ」は四国・九州地方に相対的に多い（なお本稿では「九州」には沖縄県を、「東海」には三重県を含む）。この傾向は、図1に示し

た分布図とおおむね一致する。「エイ／エー」の発音には、現在においてもこうした地域差を伴っていることも、今回の多人数調査から確認された。

3.2. 東京都での状況

全国調査では、全体の設問数との関係から、連母音「エイ」に関する設問は「英語」のみであったが、他の語を含めてさらに詳しく調査するため、日本の首都であり言葉の点でも共通語の基盤となっている東京都での状況を調査することとした。

調査では、全国調査と同様の説明を調査員から回答者に対し行ってもらい、録音は回答者から承諾を得た後に行った。録音はICレコーダを用いた。回答の際の注意事項についても、全国調査と同様の指示を行った。

連母音「エイ」を調査するのに用いた語と調査目的は次のとおりである。

- ・「英語」の「英」：全国調査と同じ項目
- ・「毛糸」の「けい」の連母音「エイ」：形態素境界をはさむ連母音
- ・「招いた」の「ねい」の連母音「エイ」：語幹と活用語尾の接続部の連母音
- ・「ネイル」の「ねい」の連母音「エイ」：外来語の連母音
- ・「先生」「生徒」の「生」の連母音「エイ」：語内・文内の位置による傾向

具体的な質問文は次のとおりである。本調査でも、質問文の末尾は「何ですか」とせず言いさしのような形にした。

- (6) **【英語】** 中学校で勉強する外国語は…
- (10) **【毛糸】** セーターを編むのに使う糸は…
- (12) **【招いた】** 自分の家に来るように誘うことを「招く」と言いますが、「招く」の過去形は…
- (24) **【ネイル】** **【回答票 33】** 若い女性などが爪に塗るのは「マニキュア」ですが、では爪に付ける飾りで、カタカナの「ネ」で始まるものは…
- (34) **【先生／生徒】** **【回答票 43】** 「先生と生徒」「生徒と先生」

回答が得られにくいと予想された項目や、短文を読んでもらう方法で発音を求めた項目は、回答者の手元に置いて回答を求めた「回答票」というカード（イラストや短文が記されたカード）を用いた。「ネイル」ではそれが描かれたイラストを、「先生／生徒」については「先生と生徒」「生徒と先生」という短文を提示した。

「英語」については、「英語」以外が回答された場合は、「ほかの外国語は…」とさらに質問してもらった。

「招いた」については、回答が得られにくい回答者がいることが予想された（実際にそうであった）。その場合は「「あの人をきょう招く」に対して「あの人をきのう」で言い始めると…」とさらに質問してもらった。

「ネイル」については、省略形でない「ネイルアート（ネールアート）」という回答が得られることも予想されたが、そうした回答が得られた場合は、「「アート」を取って言ってください」と再度回答を求めることで、「ネイル（ネール）」という語で統一することとした。

事後の聴き取りは筆者が行なった。

結果は図3のとおりであった。回答者は1,049人であるが、録音が得られなかった回答者や無回答者等がいるため、有効回答者数はこれより少なくなる。

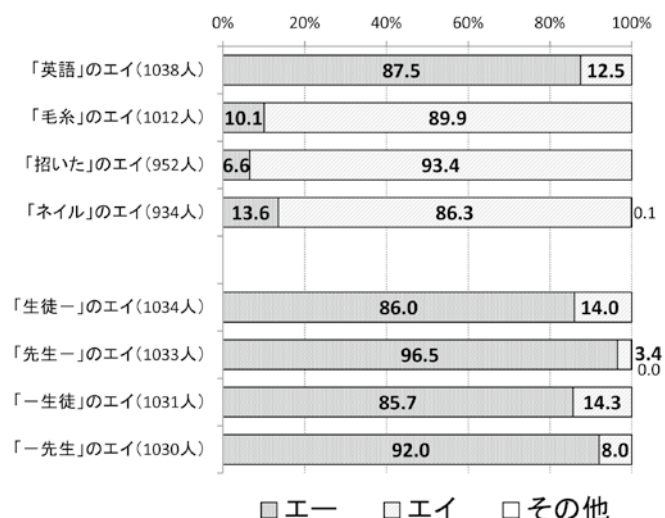


図3 連母音「えい」の部分の発音（東京都）

結果を検討しよう。

「英語」は、先に見た全国調査と同様、「エー」が非常に多く9割近くに達する。全国調査の「首都圏」の「エー」の88.0%とはほぼ同じ数値である。

これに対し形態素境界をはさむ「毛糸」の「えい」（実際には子音を伴う「けい」）は、「エー」が約1割と非常に低く、約9割は「エイ」であった。一口に連母音「エイ」と言っても、それを融合して「エー」と発音するには、形態素境界は強い障壁となっている。「連母音」というよりも、「エ」と「イ」がたまたま隣り合った「連接母音」と呼ぶ方がより適切であろう。井上史雄（2006）は、「毛糸」「手入れ」のような複合語の形態素の切れ目では「エイ」が現れるとする。今回の調査でも確かにその傾向が強いことが確認されたが、形態素境界という強い障壁があるにもかかわらず、「ケート」と「エー」で発音する人が少数ながら確かにおり、むしろこの事実が注目される。^{注4}

「招く」の過去形「招いた」も、「エイ」が極めて優勢であり9割を超える。動詞の語幹末尾の母音が[e]であるため、語幹と活用語尾の接続部に連母音「エイ」が来たものであることから（これも「連接母音」の方がより適切であろう）、形態素境界に近い性質を持つものである。このことが、融合の強い障壁となっているものと考えられる。井上史雄（2006）は、「稼いで」「招いた」などのカ行ガ行五段動詞のイ音便形では「エー」と発音されると指摘する。数値的には少ないものの、確かにそうした発音も行われていることが今回の調査から実証された。

原音（主として英語の発音）で[ei]を含む外来語について「エイ」と発音するか「エー」と発音するかは語による違いが大きい。たとえば数詞の「8」は「エート」よりも「エイ

ト」の方が優勢であるのに対し、「ace」は「エイス」よりも「エース」の方が優勢であろう。井上史雄（2006）は、「エー」は「テールランプ」「メーデー」など古い外来語に多いのに対し、「エイ」は「エイズ」「フェイント」など戦後流入した外来語に多いとし、新旧の違いを要因として指摘する。本調査では、最近使われるようになった外来語で、表記も発音も「エイ」が優勢ではないかと考えた、「ネイルアート」の略としての「ネイル」を調査した。結果を見ると、「エー」は1割強にとどまり、9割近くは「エイ」であった。「エイ」と発音する外来語の代表例の一つと言ってよい。

「生徒」の「生」（＝語頭の「生」）、「先生」の「生」（＝語末の「生」）について、これに文頭・文末という要素を加えた調査結果を見ると、いずれも「エー」が極めて優勢であるものの、文頭・語頭の「生徒－」では「エイ」も14.0%と一定程度いるのに対し、文頭・語末の「先生－」では「エイ」が3.4%と著しく少ないことから、文頭においては語頭の方が「エイ」が現れやすいことがわかる。語頭の方が「エイ」が現れやすいというこの傾向は文末の「－生徒」「－先生」にも見られる。一方、文頭と文末の違いは、「生徒」についてはほとんど見られないものの、「先生」については文末で「エイ」の数値が高くなる。この「－先生」は、語末でありかつ文末であることから発話末ということになる。そうすると、語頭ではある程度「エイ」が現れやすく、また発話末でも多少「エイ」が現れやすいということになる。発話する際の意識化されやすい位置ということが関係しそうであるが、今後さらに実験等による精査が必要である。

以上の結果について、次に回答者の属性別に見てみよう。

(1) 「英語」の連母音「えい」の発音

図4により回答者を男女別・年齢層別に見ると、男女差・年齢差はほとんどないと言ってよい状況である。

回答者を出身地別に見ると、九州地方出身者は他の地域出身者よりも「エイ」の使用者率が高いことが確認される。図2で確認した全国における地域差が、東京都内在住者にも反映されているものと考えられる。そうすると、四国地方出身者にもその傾向が認められることが推測されるが、有効回答者数が14人と少ないこともあり確認できない。

右側のグラフは、都内の地域差の有無を確認するために、都内を3つのボタンにより地域区分して分析したものである。

東京都を大きく「23区」とそれ以外の「多摩」に分けて分析したところ、これらの間で地域差はほぼ見られない。

グラフのその下の地域区分は、区部(23区)を一般的な区分に従いさらに4地域に区分し、あわせて多摩地区も3つの地域に区分して分析したものである。^{注5} 回答者数が極端に少なく数値が安定していない「皇居」（＝千代田区）を除けば、これらの間でも地域差はほぼ見られない。

さらにその下の地域区分は、東京都生活文化局編（2021）の地域区分によるものである。^{注6} 回答者が少ない「多摩（西部）」を除き、やはり地域差はほぼ見られない。

結局、回答者の出身地を除けば、性別・年齢層・居住地による違いは認められない。

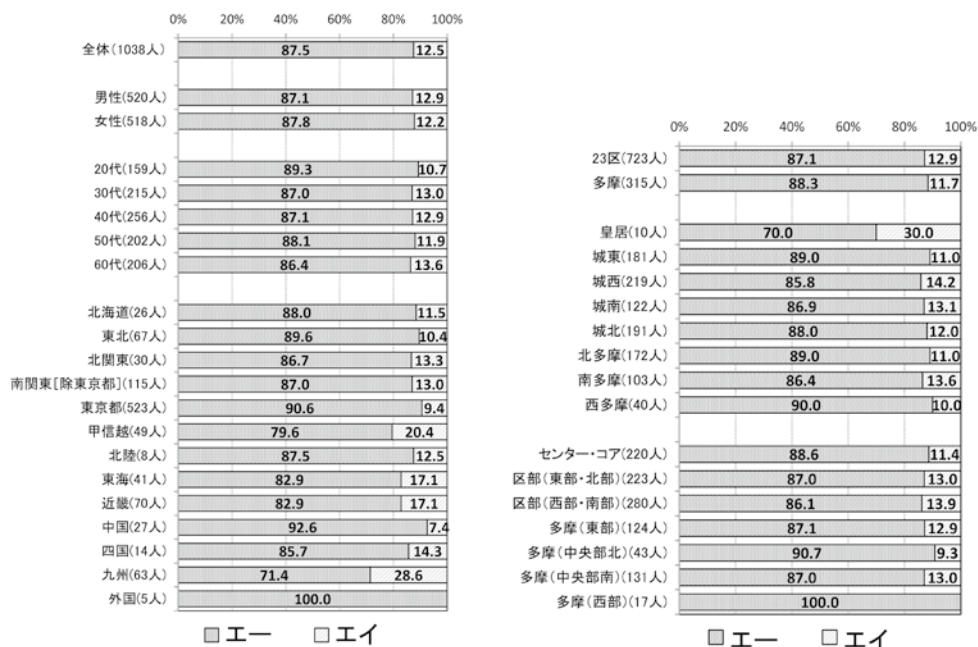


図4 「英語」の連母音「えい」の発音（東京都）

(2) 「毛糸」の「けい」の連母音「えい」の発音

図5により回答者を男女別に見ると、男女差はほぼないと言ってよい状況である。

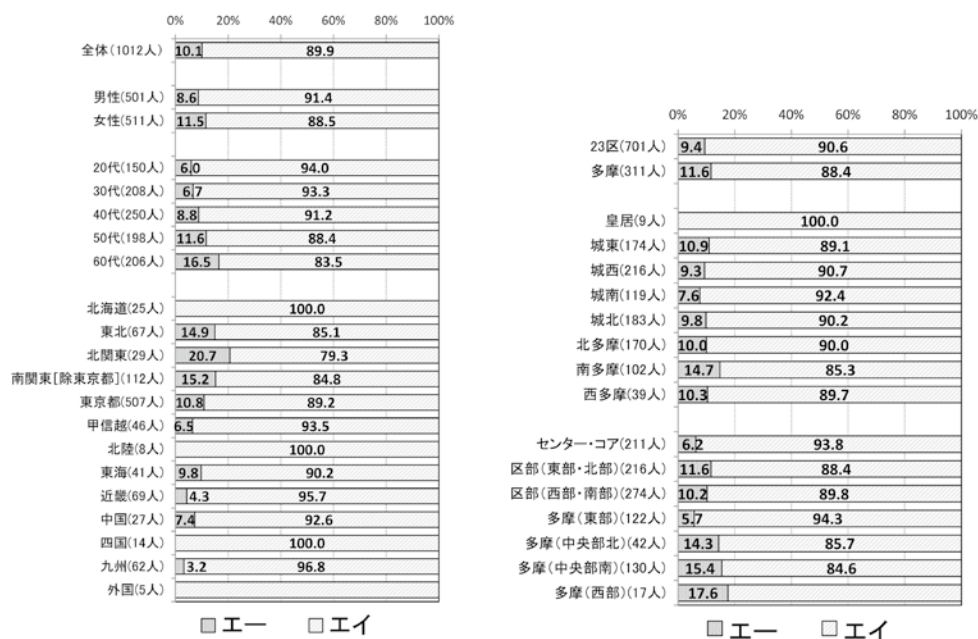


図5 「毛糸」の「けい」の連母音「えい」の発音（東京都）

年齢層別に見ると、高年層になるほど「エー」の数値が高くなる傾向がゆるやかに認め

られる。特に60代は16.5%と一定の割合を占める。これについては、最近生まれた人ほど発音の規範性が強くなり「エー」が減少すると解釈する可能性と、年齢が高くなるに従い規範から外れた「エー」で発音する人が増加すると解釈する可能性が考えられる。同じ生年層を経年比較するコーホート分析を含む経年調査による解明が今後望まれる。

回答者を出身地別に見ると、東北地方・関東地方出身者は他の地域出身者よりも「エー」の使用者率が高いことが確認される。逆に九州地方で「エー」が低いのは、「英語」の「えい」で「エイ」の使用者率が高いことと関連する現象であろう。規範性の強さには地域差も若干ありそうであり、形態素境界を挟む「毛糸」等についても今後全国を対象とする調査が望まれる。

回答者が現在住んでいる地域別に見ると、「エー」は多摩中央部と多摩西部を中心とする多摩地区にやや多く、区部では少ない傾向が見られる。東京都への転入者の居住地の片寄りが関係する可能性と、もともと都内に地域差がある可能性が考えられる。今後、東京都を15歳までの最長居住地とする回答者を抽出して分析する等により、その点のある程度解明できそうである。

(3) 「招いた」の「ねい」の連母音「えい」の発音

図6により回答者を男女別に見ると、「エー」の使用者率は多少男性で高い。ただし著しい違いではない。

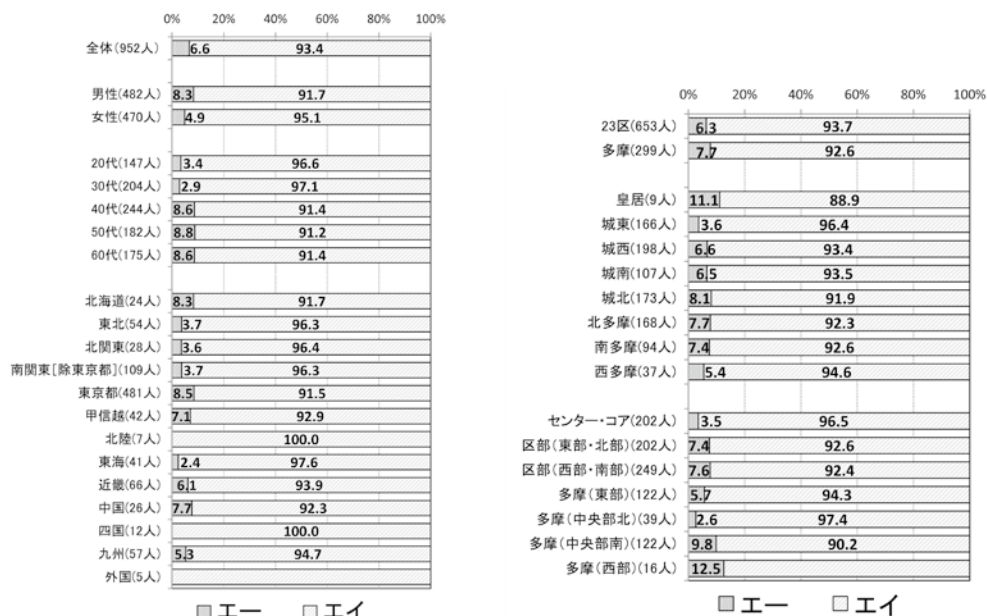


図6 「招いた」の「ねい」の連母音「えい」の発音（東京都）

年齢層別に見ると、30代以下では「エー」の数値は極めて少ない一方、40代以上では1割近くとなる。高年層になるほど「エー」の数値が高くなる「毛糸」と似た傾向がゆるやかに認められる。

回答者を出身地別に見ると、この項目については顕著な地域差は認められず、「エー」

の数値はどの地域でも低い。

回答者が現在住んでいる地域別に見ると、顕著な地域差は認められないが、回答者数がある程度いる地域の中では、多摩中央部南で「エー」の数値がやや高い。

(4) 「ネイル」の「ねい」の連母音「えい」の発音

図7によると、男女差はほぼないと言ってよい状況である。

年齢層別に見ると、高年層になるほど「エー」の数値が高くなる傾向が認められる。特に60代では25.9%に達し、4人に1人は「エー」で発音している。比較的新しい外来語であることから、若年層ほど原音に近い発音で行なっている可能性が考えられる。

回答者を出身地別に見ると、明確な違いは認められない。

回答者が現在住んでいる地域別に見ると、「エー」は多摩東部を中心とする多摩地区にやや多く、区部では少ない傾向が見られる。

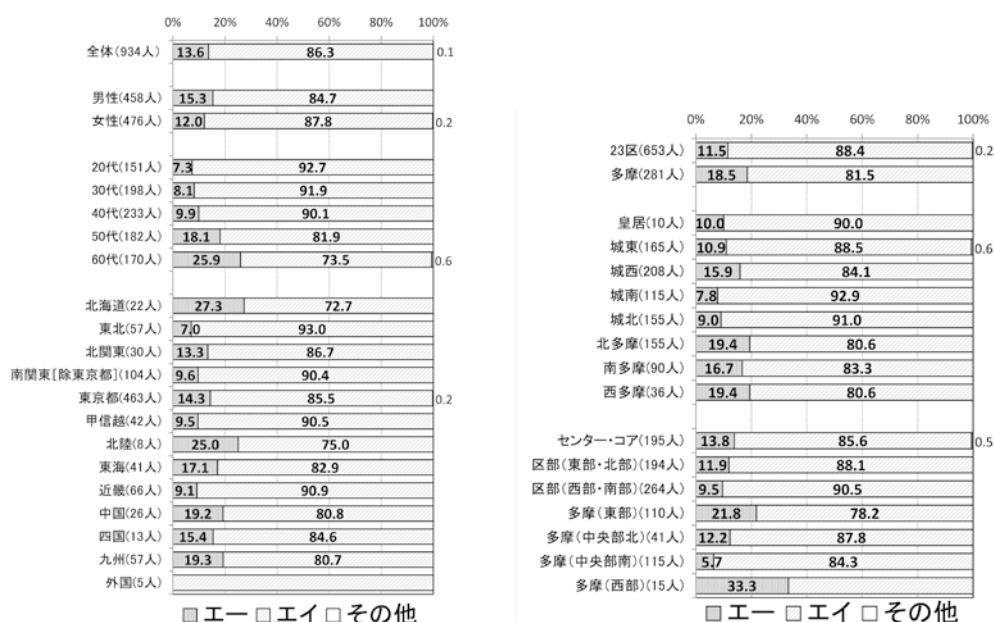


図7 「ネイル」の「ねい」の連母音「えい」の発音（東京都）

(5) 「生徒（と先生）」の「せい」の連母音「えい」の発音—文頭・語頭での発音—

図8によると、男女差はほぼないと言ってよい状況である。

年齢層別に見ると、20代で「エイ」の使用者率が多少高いものの、一貫した顕著な年齢差は見られない。

回答者を出身地別に見ると、九州地方出身者は他の地域出身者よりも「エイ」の使用者率が高いことが確認される。回答者は少ないが、四国地方出身者にもその傾向が認められる。先に見た「英語」の「えい」と同様、図2で確認した全国における地域差が、東京都に在住者にも反映されているものと考えられる。

回答者が現在住んでいる地域別に見ると、城東地区やセンター・コア、多摩中央部南で「エイ」がやや多い傾向が見られる。

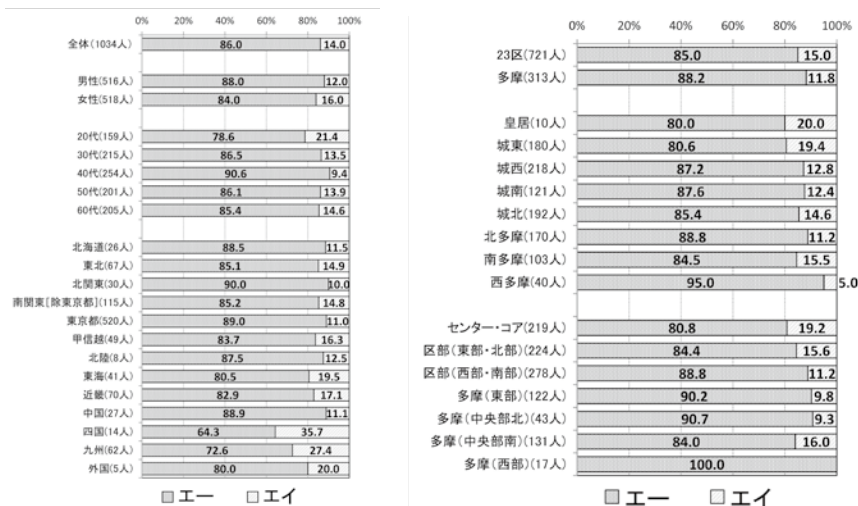


図8 「生徒 (と先生)」の「せい」の連母音「えい」の発音 (東京都)

(6) 「先生 (と生徒)」の「せい」の連母音「えい」の発音—文頭・語末での発音—

図9によると、全体の数値がほぼ「エー」一色ということもあり、男女差はほぼないと言ってよい状況である。年齢差についても同様である。

回答者を出身地別に見ても、明確な地域差は認められない。先の「生徒」に見られた九州地方・四国地方の出身者における「エイ」の相対的な優位性は、文頭においては、語頭に限定して認められる傾向のようである。語頭は語末よりも発音が意識化されやすいという事情があるのかもしれないが、この点についてはさらに検討を要する。

さらに、回答者が現在住んでいる地域別に見ても、顕著な違いは認められない。

結局語末の「えい」については、「エー」の数値が極めて高いという事情もあり、属性別の違いはほとんどないと言ってよい状況である。

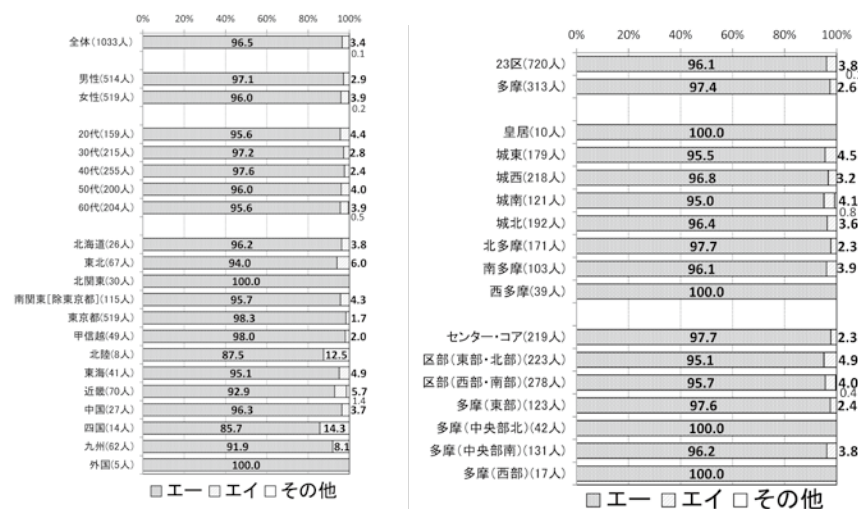


図9 「先生 (と生徒)」の「せい」の連母音「えい」の発音 (東京都)

(7) 「(先生と) 生徒」の「せい」の連母音「えい」の発音—文末・語頭での発音—

図 10 によると、男女差については、男性で「エー」がやや多いが、顕著な違いというほどではない。

年齢層別に見ると、20代で「エイ」の使用者率が多少高いものの、60代にもその傾向がやや認められ、一貫した形での顕著な年齢差は見られない。

回答者を出身地別に見ると、文頭での「生徒」と同様、九州地方出身者は他の地域出身者よりも「エイ」の使用者率が高い。回答者は少ないが、四国地方出身者にもその傾向が認められる。結局、これらの出身者においては、文の位置よりも語の位置の方が要因として大きく作用している。

回答者が現在住んでいる地域別に見ると、明確な違いは認められない。

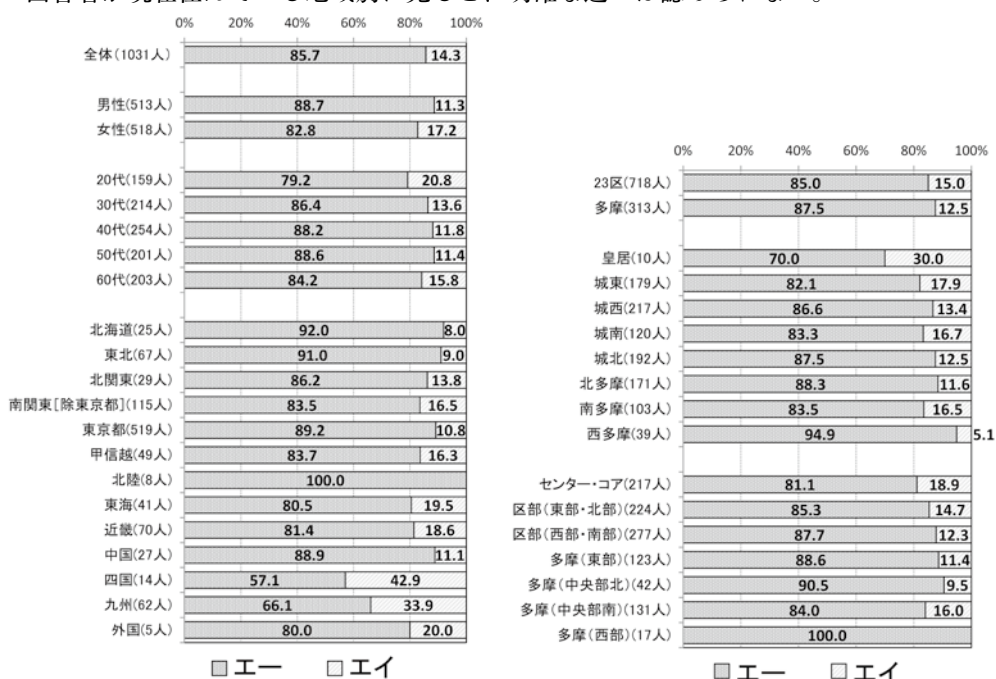


図 10 「(先生と) 生徒」の「せい」の連母音「えい」の発音 (東京都)

(8) 「(生徒と) 先生」の「せい」の連母音「えい」の発音—文末・語末での発音—

図 11 によると、文末においても、「エー」の全体での数値が9割を超えるという事情もあり、男女差はほぼないと言ってよい状況である。年齢差についても同様である。

回答者を出身地別に見ても、明確な地域差は認められない。先に指摘したように、これらの出身者においては、文の位置よりも語の位置の方が要因として大きく作用している。

回答者が現在住んでいる地域別に見ても、回答者数が極端に少ない皇居 (=千代田区)を除けば、顕著な違いは認められない。

文末においても語末の「えい」については、「エー」の数値が極めて高いという事情もあり、属性別の違いはほとんどないと言ってよい状況である。

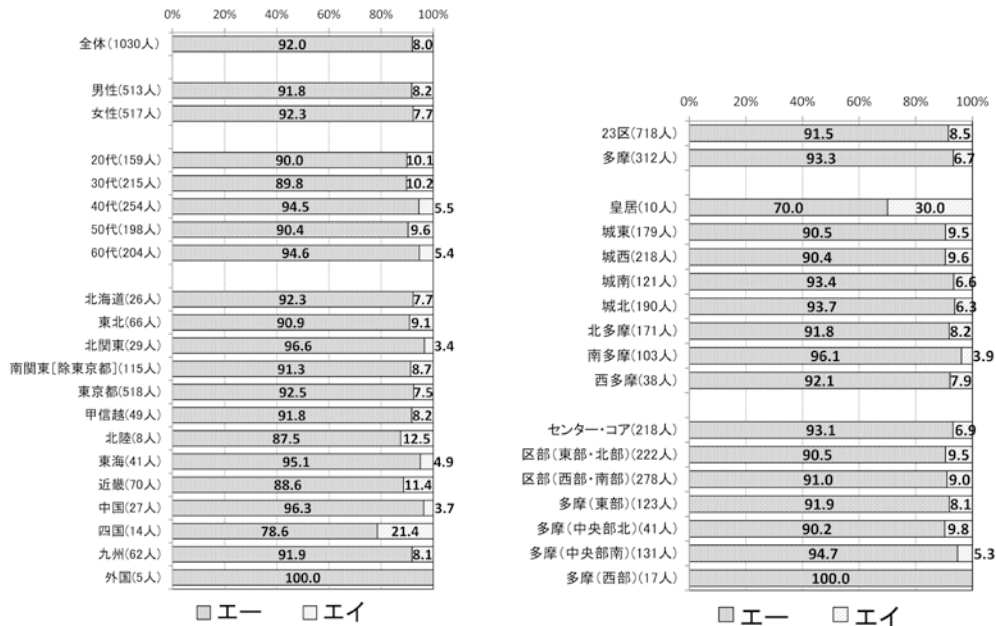


図 11 「(生徒と) 先生」の「せい」の連母音「えい」の発音 (東京都)

4. まとめと今後の課題

本研究で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

(1) 語種や形態素境界等と「えい」の発音の関係

2009 年実施の全国調査によると、「英語」の「えい」を「エー」と発音する人は 8 割超と多数を占めている。一方、「エイ」と発音する人は少数であるものの 2 割弱はいる。「エイ」から「エー」への変化は、数値的には定着の一手手前である。地域差が明確に認められ、元の発音である「エイ」は、現在でも四国・九州地方に相対的に多い。

2018-19 年実施の東京都での調査によると、「英語」の「えい」を「エー」と発音する人は 9 割近くに達する。全国調査と同様の傾向である。回答者を出身地別に見ると、九州地方出身者は他の地域出身者よりも「エイ」の使用者率が高く、全国における地域差が東京都在住者に反映されている。

東京都では「英語」以外についても調査した。

形態素境界を挟む「毛糸」の「えい」は、「エー」は約 1 割と非常に低く、約 9 割は「エイ」であった。形態素境界は連母音融合の強い障壁となっている。回答者を年齢層別に見ると、高年齢層になるほど「エー」の数値が高くなる傾向がゆるやかに認められる。また、回答者を出身地別に見ると、東北地方・関東地方出身者は他の地域出身者よりも「エー」の使用者率が高く、逆に九州地方出身者は「エー」が低い。

動詞の語幹と活用語尾の境界に来ることから、形態素境界を挟むのとある程度似た状況にある「招く」の過去形「招いた」も、「エイ」が極めて優勢であり 9 割を超える。年齢層別に見ると、30 代以下では「エー」が極めて少ない一方、40 代以上では 1 割近くとなり、

「毛糸」と同様、高年層になるほど「エー」の数値が高くなる傾向がゆるやかに認められる。

最近使われるようになった外来語として「ネイル」を調査したところ、9割近くは「エイ」であった。「エイ」と発音する外来語の代表例の一つと言える。年齢層別に見ると、高年層になるほど「エー」の数値が高くなる傾向が認められた。特に60代では4人に1人は「エー」であった。

(2) 語の位置や文の位置と「えい」の発音の関係

「生徒」の「生」(＝語頭の「生」)と「先生」の「生」(＝語末の「生」)について、これに文頭・文末という要素を加えた調査によると、いずれも「エー」が極めて優勢であった。ただし、文頭・文末ともに、語頭の方が(つまり「生徒」の方が)、語末よりも(つまり「先生」よりも)、本来の発音である「エイ」が相対的に多い。

語末の「先生」については、文頭か文末かにも違いも見られ、「エイ」の数値は文頭よりも文末で高い。文末で語末ということは発話末である。すなわち、語頭ではある程度「エイ」が現れやすく、発話末でも多少「エイ」が現れやすいということになる。発話する際の意識化されやすい位置ということが関係していそうである。

語頭である「生徒」の「エイ」には、文頭においても文末においても、九州地方出身者(や四国地方出身者)は他の地域出身者よりも「エイ」の使用者率が高い。「英語」の「エイ」と同様、全国における地域差が東京都在住者にも反映されているが、こうした地域差が東京都において見られるのは語頭においてである。

本稿では、予備的調査によるデータを分析して論じた尾崎喜光(2022)の発話場面等の改まり性や語の重要性という観点から離れ、「エイ」の実際の発音がどうであるのかを多人数調査の結果から見てきた。

もっとも今回の調査も、発話の場面性から離れられるわけではない。単語を単独で発話する、短文の形で発話するというスタイルによる発話であり、そのような場面における発音を調査したことになる。

こうした場面性については、日常的な観察にもとづくと思われることからの指摘が少数ながらある。高山知明(1992)は、丁寧な形は「エイ」であるという記憶が残っており、その意味で古形の「エイ」が規範的な地位をまだ完全に「エー」に明け渡していない段階にあるとする。高山知明(2003)も、正しい発音は仮名どおりの「エイ」であるという規範意識が存在し、実際にそう発音されることもないわけではないと指摘する。

井上史雄(2006)は、「エイ」は地域的には九州や和歌山県などに残るが、東京でも改まった発音で残ったとする。

久野マリ子(2018)も、普段は「正解」を「セーカイ」と発音していても、正しくは「セイカイ」と意識されることが多いとする。

上野善道編(1989)は、図1の解説の中で、「エイ」の発音について「大分県を除く九州6県では一般に新しい字音語や改まった発音の場合顕著」と注釈をつけている。「エイ」が比較的多く残存し、その傾向が東京都への転入者にも認められる九州地方においては、こうした改まり性による使い分けがより明確になされている可能性がある。

今回の多人数調査の結果をふまえつつ、多様な場面性を含む実際の発話データの調査、

場面をコントロールしての実験的発話調査、現在でも場面差を把握しやすい可能性のある九州地域での調査等へと研究を展開する必要がある。

注

- 1 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループの研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究（日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究）」（2006年度～2009年度前期）の一環として、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」により実施した。
- 2 JSPS 科研費 JP18H00673（研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」；研究代表者・尾崎喜光）の一環として実施した。
- 3 奥村三雄（1957）は、近世の発音を反映した資料において、連母音 [au] [eu] [iu] は長音で発音される表記がなされているのに対し、連母音 [ei] にはそうした表記が認められないことを調査資料から指摘し、これは、当時の近畿・九州方言において「アウ」「エウ」「イウ」は長音化していたが、「エイ」はまだ長音化していなかったことを示しているのではないかと推測している。一口に連母音の長音化と言ってもそこには遅速があり、「エイ」はようやく現在定着の一手手前に至ったものと考えられる。なお、連母音「アイ」「オイ」「ウイ」の長音化（「アイ」「オイ」は「エー」、「ウイ」は「イー」への変化）は、文体的特徴（低文体で現れやすい）や大きな地域差を現在のところ伴っており、今後日本語の通常発音として定着するとしても、まだ相当先のことと考えられる。
- 4 大阪府出身の劇作家・演出家で、大阪弁について自身の体験等からその特徴をエッセイとして記したわかぎふ（2005）は、「ケエト」の項で、かつての大阪弁での「毛糸」の発音について次のように紹介する。

大阪弁では「毛糸」を「ケエト」と読む。タテ棒でのばして「ケート」と書く人もいる。「ケイト」

は発音が角張っているの、丸くしたのだろうか？ とにかくみんな「ケエト」と読み書きした。

今回の調査対象地域は東京都であったが、国内で地域差もありそうである。今後注目したい。

- 5 各地域には次の市区町を含む。実際に調査対象となった市区町のみを記す。なお、城東・城西・城南・城北に含める区の分類についてはこれ以外のものもある。

皇 居：千代田区

城 東：中央区、台東区、墨田区、江東区、葛飾区、江戸川区

城 西：新宿区、世田谷区、渋谷区、中野区、杉並区、練馬区

城 南：港区、品川区、目黒区、大田区

城 北：文京区、豊島区、北区、荒川区、板橋区、足立区

北多摩：立川市、武蔵野市、三鷹市、府中市、調布市、小金井市、小平市、東村山市、国分寺市、

国立市、狛江市、清瀬市、東久留米市、武蔵村山市、西東京市

南多摩：八王子市、町田市、日野市、多摩市

西多摩：青梅市、羽村市、瑞穂町

- 6 各地域には次の市区町を含む。実際に調査対象となった市区町のみを記す。

センター・コア：千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区、台東区、墨田区、江東区、渋谷区、

豊島区、荒川区

区部（東部・北部）：北区、板橋区、足立区、葛飾区、江戸川区

区部（西部・南部）：品川区、目黒区、大田区、世田谷区、中野区、杉並区、練馬区

多摩（東部）：武蔵野市、三鷹市、調布市、小金井市、小平市、東村山市、国分寺市、狛江市、清瀬市、東久留米市、西東京市

多摩（中央部北）：立川市、武蔵村山市、羽村市、瑞穂町

多摩（中央部南）：八王子市、府中市、町田市、日野市、国立市、多摩市

多摩（西部）：青梅市

参考文献

- 井上史雄（2006）「外来語の表記と発音の問題点－エイを中心に－」『明海日本語』10・11
- 上野善道編（1989）『日本方言 音韻総覧』（小学館） *非売品
- 奥村三雄（1957）「近世音韻史料としての黄檗唐音」『岐阜大学研究報告（人文科学）』5
- 尾崎喜光（2015）「全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』39-1
- （2021）「東京都における母親の呼称の時代変化と加齢変化」『清心語文』23
- （2022）「音声と敬語のあいだ－場面・事象の改まり性と音声選択の関係に関する予備的研究－」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』46-1
- 久野マリ子（2018）「方言音声」日本語学会編（2018）『日本語学大辞典』（東京堂出版）
- 高山知明（1992）「日本語における連接母音の長母音化－その歴史的意味と発生の音声的条件－」『言語研究』101
- （2003）「第2章 現代日本語の音韻とその機能」北原保雄監修・上野善道編集『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』（朝倉書店）
- 東京都生活文化局編（2021）『世論調査結果報告書 令和2年9月調査 都民生活に関する世論調査』（非売品）
- わかぎあふ（2005）『大阪弁の秘密』（集英社文庫）